

1999 年度学会報告優秀賞

現代ロシア語の母音体系

— 単音 [i] と [ɨ] の構造的解釈 —

古 賀 義 顕

本稿では、現代ロシア語の非円唇前舌高母音 [i] と非円唇中舌高母音 [ɨ] に関する従来の解釈をふまえ、記述主義の原理的な立場から新たに音韻解釈の過程を提示し、「現代ロシア語のいかなる音節も子音で始まる」と考えさえすれば、[i] と [ɨ] に共通する特徴の束としての音素 /ɪ/ を設定することができるという可能性を指摘する。さらにこの解釈に基づき、従来の伝統的な記述による母音体系とは異なる母音体系を提案し、これを支持する間接的な根拠として、この解釈が形態論の記述にもたらすメリットに言及し、また母音体系の方言的差異の解釈に関する仮説にも触れる。本稿の解釈案は他のありうる諸解釈のうちの一案にすぎないが、本案は、音韻解釈上の諸原則に準拠し、かつ音声現実の観察と話者の内省から乖離しないかぎり、広範な音韻現象を最も簡潔に説明しうる解釈がより妥当である、という前提に基づく案である。

1. [i] と [ɨ] の再解釈の第1段階¹

子音で始まる1音節語のうち、[ɨ] または [i] を音節主音とする語を表1に掲げる。角括弧内の音声表記は簡略表記である（以下同じ）。² A類の語頭子音は「硬子音」つまり非口蓋化子音（正しくは**軟**口蓋化子音）であり、B類の対応の語の語頭子音は「軟子音」つまり口蓋化子音（正しくは**硬**口蓋化子音）である。各行において対をなす語は最小対をなしているように見える。これらの対の差異を語頭の子音の差異とそれに続く母音の差異の両方に帰す解釈による音素表記を「a案」の列に記し、これらの対の差異を語頭の子音の差異のみに帰す解釈による音素表記を「b案」の列に記す。前者は音素 /ɪ/ と /ɨ/ を設定する解釈案であり、後者は音素 /ɨ/ を設定しない解釈案である。確認しえたかぎりでは、ロシア語の [ɨ] と [i] に関する従来の解釈には a案と b案以外の解釈はなかった。³

子音で始まる2音節以内の語のうち、[ɨ] [i] 以外の母音を音節主音とし、

古賀義顕

表 1

(A 類)		a 案	b 案	(B 類)		a 案=b 案
1.	был	[b ⁱ ˈl]	《あった》	/b ⁱ l/	/b ⁱ l/	
2.	выл	[v ⁱ ˈl]	《吠えた》	/v ⁱ l/	/v ⁱ l/	
3.	ныть	[n ⁱ ˈtʲ]	《疼く》	/n ⁱ tʲ/	/n ⁱ tʲ/	
4.	пыл	[p ⁱ ˈl]	《情熱》	/p ⁱ l/	/p ⁱ l/	
5.	сыр	[s ⁱ ˈr]	《チーズ》	/s ⁱ r/	/s ⁱ r/	
1.	бил	[b ⁱ ˈl]	《打った》	/b ⁱ l/	/b ⁱ l/	
2.	вил	[v ⁱ ˈl]	《編んだ》	/v ⁱ l/	/v ⁱ l/	
3.	нить	[n ⁱ ˈtʲ]	《糸》	/n ⁱ tʲ/	/n ⁱ tʲ/	
4.	пил	[p ⁱ ˈl]	《飲んだ》	/p ⁱ l/	/p ⁱ l/	
5.	сил	[s ⁱ ˈl]	《力(複数)の》	/s ⁱ l/	/s ⁱ l/	

かつ語頭子音の硬軟の差異と語頭音節の母音の差異によって異なる語の対を表 2 に掲げる。A' 類の語頭子音は硬子音、B' 類の語頭子音は軟子音である。軟子音の直後の母音を対応の硬子音の直後の母音と較べると、前者の調音点は後者の調音点よりも前でありかつ高く、前舌面が硬口蓋に向かい上昇（高舌化）し、かつ前進（前舌化）している。この調音上の特徴及びそれに伴う [i] に似た ([i]-образный), 硬口蓋性を帯びた音色を補助記号 [] で表す。

表 2

(A' 類)		(B' 類)	
1.	рад 《嬉しい》	[raˈt]	/rát/
2.	вол 《去勢牛》	[voˈl]	/vól/
3.	суда 《船(複数)》	[sudaˈ]	/sudá/
1.	ряд 《列》	[r ^ˈ aˈt]	/r ^ˈ át/
2.	вел 《導いた》	[v ^ˈ oˈl]	/v ^ˈ ól/
3.	сюда 《ここへ》	[s ^ˈ udaˈ]	/s ^ˈ udá/

[a] [o] [u] は硬子音の直後に現れ, [a₊] [o₊] [u₊] は軟子音の直後に現れており, 相補分布をなしている。また音声的に類似している [a] と [a₊], [o] と [o₊], [u] と [u₊] の間の差異である [] で表した特徴は直前の（同じ硬口蓋性を特徴とする）軟子音に該当する特徴であり, 軟子音が順行同化の作用によって後続の母音に硬口蓋性を附与している, と考えるため, [a] と [a₊], [o] と [o₊], [u] と [u₊] をそれぞれ同一音素/a//o//u/として認定してよいだろう。表 2 の各語に施した音素表記は [] を余剰な特徴とみなすこうした解釈の結果であり, 各音韻論学派の「理論」に帰せられる, あまり本質的ではない表記上の相違を無視すれば, 従来の解釈も実質的にこれと同じ解釈である。こうした解釈が妥当なら, 表 1 の対の解釈に際して, /i/ではなく/i/を音素として立てないのはむしろ不自然である。というのも, /i/を音素として立てさえすれば, 「軟子音の直後で母音は高舌化かつ前舌化する」という説明を [i] [i] にもそれ以外の母音にも一様に適用でき, 音素表示から適切な音声表

現代ロシア語の母音体系

示が導かれるからである（その際 [i̯] は本来的に [高舌] という特徴を持つ母音であり、したがって /i̯/ は軟子音の直後で前舌化の作用のみをこうむる）。したがって表 1 の B 類の [i̯] は、/i̯/ が直前の軟子音の影響により前舌化した姿と考えるのが順当であろう。

母音ないし半母音 [j] で始まる語を表 3 に掲げる。

表 3

(A 類)				(B 類)			
1.	это	《これ》	[e'tə] /éta/	1.	ела	《食べた》	[je'la] /jēla/
2.	ад	《地獄》	[a't] /át/	2.	яд	《毒》	[ja't] /jāt/
3.	оба	《両方》	[o'bə] /ōba/	3.	елка	《ヨルカ》	[jo'lkə] /jōlka/
4.	утро	《朝》	[u'trə] /útra/	4.	юг	《南》	[ju'k] /júk/
5.	ы ⁴	《(字母の名)》	[i'] /i/	5.	——		
6.	ил	《沈泥》	[i'l]	6.	——		

硬口蓋音 [j] による順行同化により、B 類の [j] の直後の各母音もやはり硬口蓋性を帯びているが、ここで注目すべきなのはむしろ、B 類の 5 行目と 6 行目が空き間になっていることである。[i̯] は [] という特徴と同様、硬口蓋性（高舌性と前舌性）によって特徴づけられるとあってよく、B 類の [e₊] [a₊] [o₊] [u₊] と同じ特徴 [] を共有している以上、ここで ил [i'l] 《沈泥》の語頭の [i̯] を軟子音 /j/ と高舌の母音音素 /i̯/ の結合とみなし、/i̯/ が /j/ によって前舌化（順行同化）された結果、[i̯] として実現している、と解釈すると、B 類 5 行目の空き間が埋まり（すなわち ы /i̯/ 《(字母の名)》: ил /jīl/ 《沈泥》）、かつ表 2 の音素表示を支える解釈との平行性も保たれるため、全体として体系的な好ましい解釈となる。音声的に類似している [i̯] と [i̯] が歴然たる相補分布を示すにもかかわらず、あえて母音音素の総数を増やす a 案の難点と、字母 ы の名称を音素表示できない b 案の難点を同時に免れているこうした解釈の反証となりうる事実はさしあたりみあたらない。

2. [i̯] と [i̯] の再解釈のメリット

2. 1. Виталию と в Италию 等の音節構造の明示

前置詞句 к илу 《沈泥のほうへ》, с илом 《沈泥とともに》, в ил 《沈泥のなかへ》の発音は概略それぞれ次の通りである（[/] は非口蓋化子音 [k] [s]

古賀義顕

[v] から後続の [i] への出わたりにおける中舌面上昇と、それに伴う音声を表す⁵⁾：[k/i'lu], [s/i'ləm], [v/i'l]。これらの句に現れる [/i] という音声に関して，[i] の前舌性と [/] が/j/に，[i] の高舌性が先に立てた音素/i/にそれぞれ該当する，とみなすと，次のような音素表示がえられる。к илу /kjɪlu/ 《沈泥のほうへ》，с илом/sjɪlam/ 《沈泥とともに》，в ил/vjɪl/ 《沈泥のなかへ》（既出 был/vɪl/ 《吠えた》と比較せよ）。[/i'] と明確に区別される [ji'] という音声はロシア語に現れない以上，こうした解釈を採ることに不都合はなく，この解釈を採れば，語頭に Cje, Cja, Cjo, Cju は現れるが（к ели [kje'li] 《エゾマツのほうへ》，к ящику [kja'ɕ'iku] 《箱のほうへ》，к елке [kjo'lk'e] 《ヨルカのほうへ》，к югу [kju'gu] 《南のほうへ》）Cji は現れない，という音声レベルでの不均衡な分布を音素レベルでの音節構造の記述に持ち込まずに済む。

さらに，こうした解釈を採れば，従来不明であった Виталию 《ヴィタリーに》と в Италию 《イタリアへ》及び Кире 《キーラに》と к Ире 《イーラのほうへ》という句の対の音節構造を明示することができる。Аванесов (1984: 143-44) はこれら各対の発音上の差異を認めてはいるが，⁶⁾ /k/ に対立する軟子音/k'/を設定せず，かつ/i/を独立した音素として認めていないため（同書 52, 60 頁以下），これらの例のそれぞれの第 1 音節をまったく同様に音素表記せざるをえないだろう。また実際に Реформатский (1957)⁷⁾ の解釈は Кире 《キーラに》と к Ире 《イーラのほうへ》に関して「音素構成は同じである состав фонем тот же」としながら「それでも区別されている А все-таки к Ире и Кире различаются!」という原理的な矛盾に陥っている。⁸⁾ それに対して，現実の音声の観察に基づく表 4 に示した私の解釈はこうした矛盾を免れていると同時に，おそらく上記の対の差異を音素構成の面と音節構造の面の両面から明示しえているはずである。

表 4	Аванесов (1984: 143-44)	Реформатский (1957)	古賀案		
			音声表示	音素表示	音節構造
Виталию	[v'i]талию	—	[v'i]талию	/v'itāl'i ju/	CVCVCVCV
в Италию	[v-i]талию	—	[v/i]талию	/vjitāl'i ju/	CCVCVCVCV
Кире	[k'i]ре	/k'ir'e/ (sic)	[k'i']ре	/k'ir'e/	CVCV
к Ире	[k-i]ре	/k-ir'e/	[k/i']ре	/kjir'e/	CCVCV

現代ロシア語の母音体系

2. 2. 規則的な/j/語幹の抽出

[a] から後続の [i] への出わたりを [//] で表す若干精密な音声表記に基づき、第2活用の動詞 *стоять* 《立っている》の現在人称活用のパラダイムを表5-1のように音声表記することができるが、やはり相補分布をなす [j] と [//] を/j/に帰すことで表5-2の音素表示がえられる。

表5-1

	単数	複数
人称	1 [stajuˈ] стою	[sta//iˈm] стоим
	2 [sta//iˈʲ] стоишь	[sta//iˈtʲe] стоите
	3 [sta//iˈt] стоит	[stajaˈt] стоят

表5-2

	単数	複数
人称	1 /stajú/	/stajím/
	2 /stajíʃ/	/stajítʲe/
	3 /stajít/	/staját/

このパラダイムを例えば第2活用の動詞 *говорить* 《話す》の現在人称活用のパラダイム (/gavarjú//gavaríʃ//gavarít//gavarím//gavarítʲe//gavarát/) と比較すれば、規則的な人称接尾辞のセット (-/ú/-/íʃ/-/ít/-/ím/-/ítʲe/-/át/) と、動詞 *стоять* 《立っている》の、/j/に終わる1種類の現在形語幹 /staj/を導き出すことができ、この結果はまた、*стоишь* 《立っている (2人称単数形)》等の [//iˈ] と例えば *ил* 《沈泥》という語の語頭の [iˈ] を同じものと感じている話者の内省にも見合っている。同じことは、*бой* 《戦い》, *слой* 《層》, *мой* 《私の》, *твой* 《おまえの》といった名辞類についてもいえ、これらの語の複数形曲用のパラダイムを表6のように示すことができる。

表6	бой 《戦い》	слой 《層》	мой 《私の》	твой 《おまえの》
単数主格	/bôl/	/slôl/	/môl/	/tvôl/
複数主格	/bají/	/slají/	/mají/	/tvají/
生格	/bajóʃ/	/slajóʃ/	/majíx/	/tvajíx/
与格	/bajám/	/slajám/	/majím/	/tvajím/
対格	/bají/	/slají/	/mají//majíx/	/tvají//tvajíx/
造格	/bajámʲi/	/slajámʲi/	/majímʲi/	/tvajímʲi/
前置格	/bajáx/	/slajáx/	/majíx/	/tvajíx/
複数形語幹	/baj/	/slaj/	/maj/	/tvaj/

アクセントを担う /i/ は /Vj/ の後に立たない、とする *Русская грамматика* 1979 (20-21) は,⁹ *бой* 《戦い (複数主格・対格)》に対して /baˈi/ と /baˈji/ を、また *моим* 《私の (複数与格)》に対して /maˈim/ と /maˈjim/ を、という具合に

古賀義顕

2種類の語形式を認める解釈を余儀なくされているが(同書125頁),¹⁰ 私の解釈には話者の内省に反するこうした矛盾はないはずである。音韻論の範囲内で [i] を軟子音と母音/i/の結合として分析した結果, 形態論において名辞類や動詞類のパラダイムを分析する際にも規則的な語幹を抽出できるという利点をもたらされること, また [/] や [//] の観察から明らかなように, ил/jél/《沈泥》等の絶対的な語頭の/j/は音韻分析のための恣意的な仮構ではないことが容易に了解できると思う。

3. [i] と [ɨ] の再解釈の第2段階: 声門閉鎖音, 呼気の強め及び軟口蓋半母音の音素的価値

ここまで [i] と [ɨ] のうち [ɨ] を代表的単音とみなし, これを/i/として設定する解釈とその利点を提示したが, この/i/という音素が実際には [i] と [ɨ] に共通する特徴を表しているにすぎないことを了解するための前提として, 従来のロシア語音韻論の記述において着目されなかった音声ないし音声的特徴, すなわち声門閉鎖音 [ʔ] と呼気の強め(これを仮に ['] で表す)と軟口蓋半母音 [ɰ] の音素的価値を見きわめねばならない。[ʔ] ['] [ɰ] を含む形式とその現れる環境は表7の通りである。

表7

語頭: 声門閉鎖音[ʔ]¹¹ 母音間: 呼気の強め[']硬子音の直後: 軟口蓋半母音[ɰ]¹²

это [ʔe'tə] 《これ》	проект [pra'e'kt] (sic) 《計画》	с этим [sɰe't'im] 《これとともに》
ад [ʔa't] 《地獄》	соавтор [sa'a'ftər] 《共著者》	в Але [vɰa'l'e] 《アーリャにおいて》
оба [ʔo'bə] 《両方》	заочно [za'o'ʃnə] 《不在で》	к Оле [kɰo'l'e] 《オーリャのほうへ》
утро [ʔu'trə] 《朝》	паук [pa'u'k] 《クモ》等	к уму [kɰu'mu] 《理性のほうへ》等
ы [ʔɨ'] 《(字母の名)》等		

[ʔ] ['] [ɰ] は相補分布をなし, さらにこの分布は調音音声学的に説明することができる。すなわち ['] は母音(母音はもちろん声門を開かずには調音しえない)の間に [ʔ] が同化した姿, [ɰ] は直前の硬子音(軟口蓋子音または軟口蓋化子音)から後続母音までのわたり部を占めているために ['] (または [ʔ]) が軟口蓋のわたり音 [ɰ] として実現した姿と考えてよく, [ʔ] ['] [ɰ] が同一音素/ʔ/に該当する異音であると解釈しうる条件が整っている(記号は'でなくともよい)。¹³ 従来, ロシア語には母音で始まる音節と子

現代ロシア語の母音体系

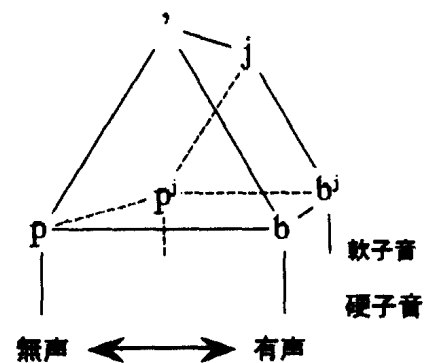
音で始まる音節がある，と解釈されてきたが，こうして/ʲ/を設定することによって今後は「ロシア語のいかなる音節も子音で始まる」と記述でき，音節構造の記述が簡潔になる。こうした観察と解釈に基づき，表3で扱った語の音素表示を表8のように改めることができる。

表8

1. это	/ʲéta/	CVCV	《これ》	1. ела	/jéla/	CVCV	《食べた》
2. ад	/ʲát/	CVC	《地獄》	2. яд	/ját/	CVC	《毒》
3. оба	/ʲóba/	CVCV	《両方》	3. елка	/jólka/	CVCCV	《ヨルカ》
4. утро	/ʲútra/	CVCCV	《朝》	4. юг	/júk/	CVC	《南》
5. ы	/ʲí/	CV	《(字母の名)》	5. ил	/jíl/	CVC	《沈泥》

ロシア語の子音体系において/ʲ/が占めるべき位置は容易に見きわめられる。従来の解釈では，硬軟の対立において軟子音/j/に1次元的に対立する硬子音は設定されてこなかった。¹⁴そこで/ʲ/をこの/j/に1次元的に対立する硬子音として位置づけると，図1のような整然とした体系が現れる。/j/は他の軟子音と同様に，

図1. 現代ロシア語の子音体系（部分）



に，後続の母音に硬口蓋性（高舌性と前舌性）を課すが，/j/の硬口蓋性は所与の子音に二次調音によってもたらされる付随的特徴ではなく，ロシア語の子音体系において/j/は硬口蓋性（軟音性）という特徴しか持たない本来的な軟音である。それに対して，他の硬子音と同様に，後続の母音に軟口蓋性を課す/ʲ/は軟口蓋性（硬音性）という特徴しか持たない本来的な硬音であり，硬軟の対立（または口蓋性の有無）において/j/に1次元的に対立する子音音素である。/j/と/ʲ/を他の，二次調音によって硬口蓋性または非硬口蓋性（軟口蓋性）を附与されているいわば「ふつう」の子音と区別して，それぞれ「口蓋音素 *палатальная фонема*」「非口蓋音素 *непалатальная фонема*」と呼ぶことができるだろう。¹⁵

古賀義顕

4. ふたたび [i] と [ɨ] について

音韻解釈のここまでの過程で明らかになったのは、ロシア語においては [i] と [ɨ] はいかなる場合にも硬軟いずれかの子音の直後に現れるのであり（「ロシア語のいかなる音節も子音で始まる」）、[i] と [ɨ] のいずれとして実現するかは、音素 /ɨ/ の直前の子音の硬軟の差異によって規定されている、と解釈しうる可能性である。ロシア語に現れる母音 [i] の前舌性は直前の軟子音に該当する特徴であり、音素 /ɨ/ にとっては余剰な特徴である、と考える現段階では、ɨ という記号で表される音素は [i] と [ɨ] に音声面で共通する特徴の束を表しているにすぎない。この時点では [ɨ] という単音を表す記号を音素 /ɨ/ の表示に用いる必然性がないため、今後本稿では誤解を招く恐れにより少ないであろう i という記号を用いていくが、ɨ と i と i のいずれの記号を用いるかはこの時点ではすでに音韻論の問題ではなく印刷技術の問題である。¹⁶ 残された課題は、音素 /ɨ/ にとっての弁別的な特徴を、他の母音音素との相対的關係において見きわめると同時に現代ロシア語の母音体系を設定しなおすことである。

5. 現代ロシア語の母音体系

上に経緯を述べた解釈に基づき、私はこの音素 /ɨ/ の弁別特徴を [単母音] [非前] [高] として、¹⁷ 図 2-2 の図式（図式 2）に示した体系の中に位置づける解釈を提案し、図 2-1 のような従来の代表的な母音体系の図式（図式 1）に代わる案としたい。

母音の（特に母音の）音色の差異は口腔内の舌の構えの相対的な差異に基づいているため、それぞれの母音音素を他の母音音素から区別している弁別特徴を仮定するには、形態論の記述にもたらされる利点や通時的な経緯など間接的な証拠に頼る以外になく、この時点でそうすることはむしろ、本稿の冒頭に述べた前提からみても望ましい。また同じ理由により、一般に受け入れられている図式 1 のような標準ロシア語の母音音素の位置づけを阻却する積極的な根拠をみいだすことはおそらく不可能だが、図式 1 の体系に関する以下のような否定的な事由はそのまま図式 2 を支える「間接証拠」になると思う。

(1) 図式 1 と基本母音図との不自然な類似。音素という emic な次元の単位が

現代ロシア語の母音体系

図2. 現代ロシア語の母音体系

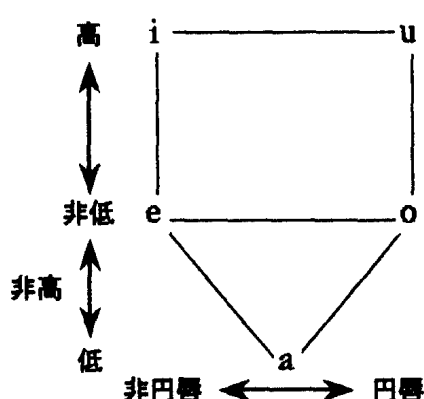


図2-1. Аванесов

(1956: 88; 1984: 53)

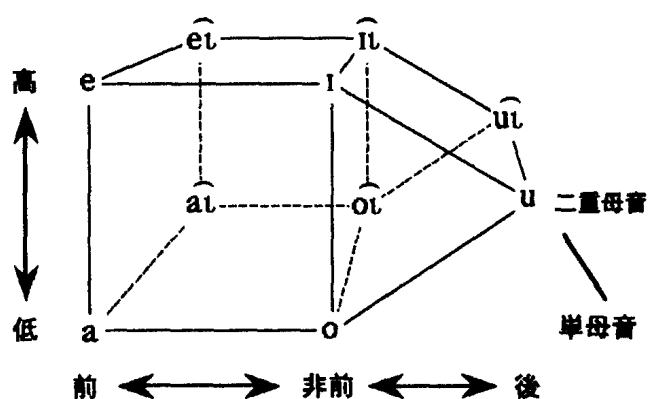
Русская грамматика 1979 (5-6)トゥルベツコイ (1980: 108-09) の
解釈による図式 (図式1)

図2-2. 古賀の解釈による図式 (図式2)

etic な次元にある音声特徴とは原理的に別次元の単位である以上、設定される音素体系も音声学的な基本母音の分類とは原理的に別次元にある、とするなら、所与の言語に現れる単音としての母音の音声的な分類と音素の分類がさように同形的であることはむしろまれではないかと私は考える。

(2) 「ロシア語では [o] が過度に円唇化されると, [u] に似た音響効果がもたらされる Применительно к русскому языку, чрезмерная лабиализация [o] приводит к акустическому эффекту [u]」という Акишина *et al.* (1990: 91) の文言は「過度に円唇化して発音される /o/ をロシア語話者は /u/ と聞き違える」あるいは「/o/ の円唇性は /u/ のそれよりも弱い」という趣旨で理解しなければ, 「[o] が過度に円唇化されると, [o] が過度に円唇化される効果をもたらす」という循環論になると同時に「ロシア語では」という限定が意味を失う。私の理解が誤解でなければ, この文言もやはり図式2を支持するものと考えることができる。図式1が含意するように, /o/ と /u/ が舌の高さのみで区別され, かつ円唇性が /o/ と /u/ の共通の弁別特徴であるなら, 円唇性と舌の高さが必然的な相関関係のないパラメータである以上, /o/ の円唇性を強めても混同がおこる可能性はきわめて低いからである。また観察したかぎりでは /u/ 自体の円唇性も比較的弱く, /o/ と /u/ が音声的なレベルで共有する円唇性は音素としての /o/ と /u/ にとって余剰である可能性が高い。

6. 母音交替との相関関係

図式1は音声としての母音の前舌性と非前舌性という特徴を事実上非弁別的な特徴とみなすとともに、円唇性と非円唇性の構造的対立を認めているが、例えば [y] と [i], [ø] と [e], [œ] と [ɛ] 等々、音声の次元で円唇性の有無のみによって1次元的に対をなす単音がロシア語に現れない以上、円唇性と非円唇性の対立を弁別的とする根拠は薄い。

標準的なロシア語の場合、アクセント核の移動（アクセント素 просодема の交替）に伴い、同一語幹の内部において概略次のような母音の交替（NB. 「弱化」ではない）が起こる。硬子音の直後で、アクセント核を担う /a//o/ は無アクセントの /a/ と交替し（《与える》 дал/dál/（男性過去）～дала/dalá/（女性過去）、《机》 стол/stól/（単数主格）～стола/stalá/（単数生格）等）、軟子音の直後で、アクセント核を担う /i//e//a//o/ が無アクセントの /i/ と交替する（《顔》 лица/l'íca/（複数主格）～лицо/l'ísó/（単数主格）、《七》 семь/s'ém'í/（主格）～семи/s'ím'í/（生格）、《毬》 мяч/m'ác'í/（単数主格）～мячи/m'ís'í/（複数主格）、《運ぶ》 вез/v'ós/（男性過去）～везла/v'ízlá/（女性過去）等）。しかし /u/ はこうした交替に関係せず（《歯》 зуб/zúp/（単数主格）～зубов/zubóf/（複数生格）、《包み》 тюк/t'úk/（単数主格）～тюки/t'úk'í/（複数主格）等）、この点においても他の母音音素と著しく異なっている。図3はロシア語に現れる語形内部の母音の分布を図式2に基づいて図式化したものだが、今述べた母音交替と語形内部の母音の対立関係が（当然ではあるが）符合している以上、/u/ が「後」という唯一の特徴（素性）で同定される図式2によって形態音韻論の記述が簡潔になる見通しがある。

図3. アクセント核に先行する音節における母音の対立

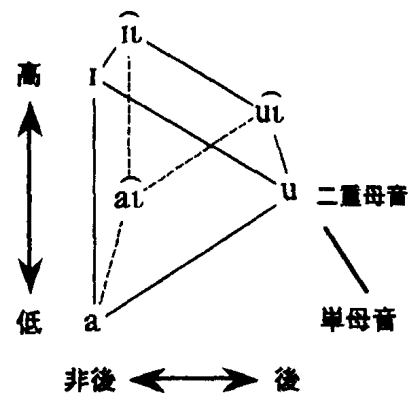


図3-1. 硬子音の直後

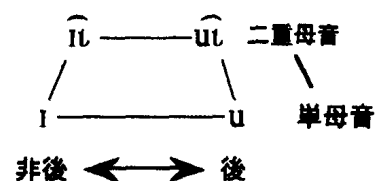


図3-2. 軟子音の直後

現代ロシア語の母音体系

7. 方言間の母音体系の相関関係

ロシア語諸方言の/u/に一貫する特徴として Пожарицкая (1997: 37) が指摘するように、原則として/u/がけっして他の母音音素と中和せず、つねに他の母音音素との対立を保つとすれば、¹⁸ 図式2は/u/のこの際だった特性を反映しえていることになる。さらに、アーカニエ аканье とイーカニエ иканье が共存し、オーカニエ оканье とイエーカニエ еканье が共存することが知られているが、¹⁹ この共存関係をそれぞれ別々にではなく単一の公式つまり図式2によって了解できるという見通しは立てられてよいだろう。すなわち、図式2を採れば、ロシア語諸方言における母音の分布の特徴に関する次のような作業仮説を提供することができる。「アーカニエ方言とオーカニエ方言の差異は母音の弁別特徴の〔前〕と〔非前〕の構造的対立の中和の有無によるものであり、アクセント核のある音節よりも前の音節において、前者ではこの対立が中和し、後者では保たれている」

〔前〕と〔非前〕の対立の中和に際して図3-1の〔高〕の地位を図式2の/i/が占め、なぜ/e/が有標なのか、また〔低〕の地位を/a/が占め、なぜ/o/が有標なのか、つまり図式2において〔単母音〕という特徴しか共有していない/i/と/a/がなぜ図3-1の〔非後〕の地位を占めるのかを現時点では私は説明できない(図3-2についても同様である)。この非対照的な分布に関しては音韻史の見直しと今後の方言調査に俟ち、考察を保留する。

8. おわりに

本稿では ы という字母が表す音声を硬子音と/i/の結合と解釈したわけだが、この解釈との関連で、私は古代教会スラヴ語のキリル文字の写本における字母 ы が「まれに ѣи と書かれ <…> ы も ѣи も ѣ と ı ないし и とを組み合わせた合字である」(木村 1985: 34) という事実はきわめて示唆的であると考え。木村(同書 39 頁)は ѣ の推定音価を「後舌母音」とし、Хабургаев (1974: 88) は「後舌中高の弱化(超短)母音音素 редуцированная (сверхкраткая) фонема」と位置づけている。繰り返しになるが、現代ロシア語に関する私の解釈では、軟口蓋(つまり後舌の)半母音 [ɥ] は非口蓋音素 /ʃ/ に該当し、字母 ы の名称の音素表示は /i/ となる。こうした外見上の単純な類似からなに

古賀義顕

がしかの結論を直接導きだすことはもちろんできないが、本稿の解釈が妥当ならば、ここに提示した母音体系と /j/ が発生した経緯に関して、本稿で特に扱わなかったアクセント素との関連をも含め、今後ロシア語音韻史の一部分を包括的に見直す余地がある。

【補論】単一音素としての二重母音について

トゥルベツコイ (1980) は二重母音を設定しない根拠を音韻解釈における方法的原則と照らし合わせるかたちで表明しているが、その解釈は説得力を欠いている。トゥルベツコイ (同書 62 頁) は「規則 1 単一音素の具現として解釈できるのは、その構成要素が当該言語において 2 つの音節に分かれられないような音結合だけである」としたうえで、次のように述べる。「ロシア語、ポーランド語、チェコ語において「母音＋音節副音的 *i*」の結合が母音の前に立つ場合、*i* は後続母音に結びつき次の音節の初頭を成す (ロシア語 *zbru-jǎ* 《馬具》, チェコ語 *ku-pu-je* 《彼は買う》等)。したがって、このような言語では、このような結合は音素結合「母音＋j」と解釈されるが、これはその結合全体が 1 音節である場合にもそうである (ロシア語 *daj* 《よこせ》＝音韻的には *daj*)」(同所)

「そうである」のかもしれないが、単一音素の具現として解釈できるのが「2 つの音節に分かれられないような音結合だけ」であるなら、ロシア語の *daj* 《よこせ》が 2 つの音節に分かれていない (「結合全体が 1 音節である」) 以上は、 $[ai]$ は音素結合「母音＋j」ではなく、単一音素 $\widehat{aj}$ ($d\widehat{aj}$ 《よこせ》) と解釈するべきではないだろうか。少なくとも、これらを単一音素の実現態として解釈しうる可能性を「規則 1」は否定しない。二重母音を認めず、例えば война $[\widehat{vaj}na']$ 《戦争》という語が CVCCV という音節構造を持つと解釈すると、音素配列論での子音束の記述が不当に複雑になる。標準的ロシア語の場合、従来設定されてきた単母音の数が 5 つ (または /i/ を含めた 6 つ) であり、対応の二重母音を設定するとしても、母音音素のレパートリーが 5 個からたかだか 10 個 (または 6 個から 12 個) に増えるにすぎず、常識の範囲を越えない。

(こが よしあき・東京大学大学院)

【付記】本稿は日本ロシア文学会 1999 年度研究発表会 (東北大学) での発表「現代ロシア語の成節音体系について：音素 /i/ の弁別特徴は何か」に基づく論文である。発表では

現代ロシア語の母音体系

「成節音」という語を用いたが、本稿では「母音」とした。「成節音」という語を用いるほうが、/n//r//l/等の鳴音を音節主音とする語をもつ他の諸言語との類型論的な比較に便利ではある（現代ロシア語において母音のみが音節主音となるのは偶然である）。「成節音」という概念を支える「音韻論的音節」という概念については稿を改めて別途論じる。また発表に際して用いた $\hat{i}$ （及び $\hat{u}$ ）という記号を本稿で i （及び u ）に換えたのは誤読を避けるための処置である。記号の問題に関しては本稿 4 節を参照のこと。

注

- ¹ 私の音韻解釈は Ш., Н. С. 氏（女性、日本語教師）の発音とその内省に基づくものであり、氏の御協力に御礼を申し述べたい。氏は 1941 年 Москва に生まれ、1 歳から 15 歳まで東シベリアの Иркутск、極東 Амур 州の Благовещенск、北コーカサス Ставрополь 州の Ессентуки で過ごした後、Москва に在住し高等教育を受けた。私は氏と同様、氏の発音がかならずしも標準的であるとは主張しないが、それは本稿の趣旨を損なうものではないと考える。
- ² 特に断らないかぎり本稿の音声表記はほぼ国際音声字母（IPA）に依拠する簡略表記である。
- ³ ここで a 案として念頭に置いているのは Щерба (1983 [1912]: 50), Зиндер (1960: 65), Гвоздев (1963: 90-114), Маслов (1998 [1975]: 53) であり、b 案として念頭に置いているのは Реформатский (1996 [1955]: 217), Аванесов (1956: 88; 1985: 53), *Русская грамматика* 1979 (5 頁以下), Тчулベツコイ (1980: 108-09), Дмитренко (1985: 24-28) 及び Панов (1997: 127-30) である。各語の音素表記は、これらの各論者ならおそらく本質的な変更なくそのように表記するであろう、という推定に基づく表記であり、各論者の著作に実際に各語の音素表記があるわけではない。
- ⁴ 外来語を除く「本来的」なロシア語には字母 ы （または $[i]$ という単音）で始まる「単語」は字母 ы の名称以外にないが、私はこうした例を音韻解釈からあえて除外する必要はないと考える。
- ⁵ 独立の $/i/$ を認定する根拠として Щерба (1983 [1912]: 50) が挙げる次の例には音声観察の粗さがみられる： вкрах $[v'ikrah]$ 《ふくらはぎにおいて》， с Иваном $[s'ivanom]$ 《イワンとともに》。私の解釈ではそれぞれ $/vj'ikrah/$, $/sj'ivānam/$ である。
- ⁶ «Таким образом, *Виталию* и в *Италию*, *Кире* и к *Ире* произносятся не одинаково» (Аванесов 1984: 143-44)。
- ⁷ Реформатский (1957) は実際には *Кире* 《キーラに》と к *Ире* 《イーラのほうへ》及び *Виталию* 《ヴィターリーに》と в *Италию* 《イタリアへ》という例を Аванесов の «Вопросы русского литературного произношения» (*Русский язык в школе*, 1937. No.3. 91-92) から引いているが、この論文は未見である。
- ⁸ もちろん、この矛盾に対する解決策を Аванесов や Реформатский が無定義のまま用いるハイフン ($[-]$ や $/-/$) に求めるわけにはいかない。また、Halle (1959: 72) の

古賀義顕

‘Rule P12’ (音韻規則 12) は Реформатский (1957) のこの矛盾を処理するためだけに設けられた ad hoc な規則である。

- ⁹ «Основные ограничения касаются фонемы /'e/ в контексте /C_/_/ и фонемы /'i/ в контекстах / # j_/_/ и /Vj_/_/» (*Русская грамматика* 1979: 20-21). なお, язык 《舌》, ему 《彼に》等の語頭に現れる [j] (*sic*) を /je/ と解釈し, иной 《他の》, иметь 《持つ》などの語頭に現れる音声 [i] と区別している点, 私は *Русская грамматика* 1979 に間然するところがない (本稿で同書を特にとり上げるのは, その音韻論及び形態音韻論の記述を現時点で最も一貫した明示的な記述と考えるからである)。
- ¹⁰ «Именные основы на <j> могут сохранять на фонематическом уровне /j/ и перед /i/, ср. Npl /ba'i/ || /ba'ji/, Dpl /ma'im/ || /ma'jim/; в отличие от них глагольные основы следуют основным правилам о сочетаемости /j/, ср. /sta'is/, /n, i ta'i/» (*Русская грамматика* 1979: 125).
- ¹¹ 実際には, 語頭の [ʔ] は ['] と自由変異の関係にある。
- ¹² ここでは特に唯一のアクセント核によってまとまりをなす「音韻論的な語」の範囲内の例を念頭に置いている。ここで前提となっているのは, Вале [va'ʔe] 《ワーリャに》と常に区別される в Але [vʌ'a'ʔe] 《アーリャにおいて》が в зале [vza'ʔe] 《ホールにおいて》と最小対をなしており, また Коле [ko'ʔe] 《コーリャに》と常に区別される к Оле [kʌ'o'ʔe] 《オーリャのほうへ》が к Толе [kto'ʔe] 《トーリャに》と最小対をなしている等という観察及び解釈である。в общем 《概して》, в основном 《基本的に》という形式に /ʔ/ が現れないことを付言しておく (音韻的にはそれぞれ /vɔɾɕ'i'm/, /vasnavnɔm/)。
- ¹³ *Русская грамматика* 1979 (4 頁以下) の「音素」/ # / は音声現実とは何の関係もなく, 事実上「語頭」及び「語末」という環境を表す記号である («К числу фонем причисляется фонема / # / — начало и конец фонемной цепочки; введение ее значительно облегчает форму описания» [同書 4 頁, 斜体強調は古賀による])。この / # / を音素として認める方法を容認すると, いやしくも〈語〉という単位をもつすべての言語に同一の音素がある, という「言語普遍 linguistic universal」の俗流類型論的な「発見」にもつながりかねない。
- ¹⁴ また /j/ は有声無声の対立軸においても対応の無声項をもたず, その意味で /j/ を Аванесов (1956: 192) は〈独り者〉音素 фонема „одиночка“ と呼んでいる。
- ¹⁵ 私は両者をまとめて仮に特徴音素 (признаковые фонемы) と総称している。
- ¹⁶ 仮に「いかなる音節も子音で始まる」と解釈しないのであれば, 非円唇中舌高母音を表す記号 (本稿での i) をそのまま用いるのが最も好ましい。
- ¹⁷ 二重母音を設定する否定的な根拠については【補論】を参照のこと。
- ¹⁸ «Фонема <y>, как правило, сохраняет свою противопоставленность другим фонемам,

現代ロシア語の母音体系

находясь с ними в отношении постоянной ненейтрализованной оппозиции» (Пожарицкая 1997: 37).

- ¹⁹ *Русский язык. Энциклопедия* の各項目, 特に «Иканье» と «Еканье» を参照のこと (いずれも Л. Л. Касаткин による執筆)。

参考文献

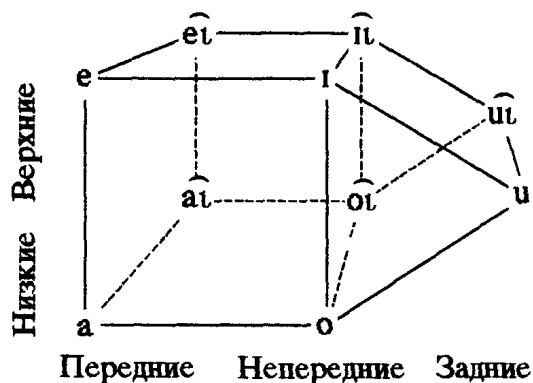
- Русская грамматика* 1979. В 2 т. Т.1. К. Ногálek и др. 1979. Praha: Akademia Praha.
- Русский язык. Энциклопедия*. Ф. П. Филин и др. 1979. Москва: Советская энциклопедия. 2-е изд. Ю. Н. Караулов и др. 1997. Москва: Большая российская энциклопедия; Дрофа.
- Аванесов, Р. И. 1956. *Фонетика современного русского литературного языка*. Москва: Изд-во МГУ.
- _____. 1984. *Русское литературное произношение*. 6-е изд. Москва: Просвещение.
- Акишина, А. А.; Барановская, С. А. 1990. *Русская фонетика*. 2-е изд. Москва: Русский язык.
- Гвоздев, А. Н. 1963. *Избранные работы по орфографии и фонетике*. Москва: Изд-во Академии педагогических наук РСФСР.
- Дмитренко, С. М. 1985. *Фонемы русского языка: Их сочетаемость и функциональная нагрузка*. Москва: Наука.
- Зиндер, Л. Р. 1960. *Общая фонетика*. Ленинград: Ленинградский университет.
- Маслов, Ю. С. 1998 (1975). *Введение в языковедение*. 3-е изд. Москва: Высшая школа.
- Панов, М. В. 1997. «Фонетика.» *Современный русский язык*. 3-е изд. В. А. Белошапкова и др. Москва: Азбуковник. 54-189.
- Пожарицкая, С. К. 1997. *Русская диалектология. Учебник*. Москва: Изд-во МГУ.
- Реформатский, А. А. 1957. «Фонологические заметки.» *Вопросы языковедения*. 2: 101-02.
- _____. 1996 (1947). *Введение в языковедение*. 5-е изд. Москва: Аспект пресс.
- Хабургаев, Г. А. 1974. *Старославянский язык*. Москва: Просвещение.
- Щерба, Л. В. 1983 (1912). *Русские гласные в качественном и количественном отношении*. Ленинград: Наука.
- Halle, Morris. 1959. *The Sound Pattern of Russian*. The Hague: Mouton.
- 木村彰一 (1985) 『古代教会スラブ語入門』 (白水社)。
- トゥルベツコイ, N. S. (1980) 『音韻論の原理』 長嶋善郎訳 (岩波書店)。

古賀義顯

Йосиаки КОГА

Современный русский вокализм: Структурная реинтерпретация [i] и [ɨ]

Цель этой статьи состоит в том, чтобы реинтерпретировать с дескриптивной позиции два гласных фона, встречающихся в русском языке, а именно [i] и [ɨ], и тем самым доказать, что вокализм современного стандартного русского языка образует систему, схематически изображенную справа.



Если только установить в качестве однозначного коррелята мягкой согласной фонемы /j/ твердую согласную фонему /ʲ/, к которой как аллофоны относятся гортанная смычка [ʔ] (напр. в *Оля* [ʔoʲlʲə]), усиленное дыхание [ʰ] (напр. в *соавтор* [saʰaʲftər]) и велярный переходный полугласный [ɥ] (напр. в *к Оле* [kɥoʲlʲe]; ср. *Коле* [koʲlʲe]) и признать, что в русском языке *всякий слог начинается с согласной фонемы*, то можно отнести различие между переднеязычным [i] и среднеязычным [ɨ] в любой словоформе к твердости / мягкости у согласной фонемы перед одной и той же гласной /ɨ/, которая представляет набор общих для [i] и [ɨ] признаков, т. е. верхнеязычность и незаднерядность.

Что касается [i] и [ɨ], то в русской лингвистике имеются две традиционных точки зрения, одна из которых относит их к разным фонемам /i/ и /ɨ/, а другая — к одной и той же фонеме /i/. В отличие от таких прежних интерпретаций, предложенный здесь вариант предоставляет ряд преимуществ для описания как фонетических, так и морфологических явлений, что, в свою очередь, служит косвенным доказательством в пользу представленной выше схемы вокализма: i) моя интерпретация позволяет эксплицитно описать такие пары фонетических слов, как *Виталию* /vʲitálʲju/ (CVCVCVCV): *в Италию* /vʲitálʲju/ (CCVCVCVCV) и *Кире* /kʲirʲe/ (CVCV): *к Ире* /kʲirʲe/ (CCVCV); ii) она дает возможность извлечь из парадигм таких слов, как *стоять*, *мой* и т. п., регулярные основы на /j/; iii) кроме того, данная схема дает возможность объяснить различие между акающими и окающими говорами тем, что во-первых оппозиция передний / непередний в предударном слоге в той или иной словоформе нейтрализуется, а во-вторых она сохраняется.